

7 徒長枝を利用したクリ「筑波」の超低樹高整枝法

ねらいと成果

クリの低樹高整枝法が普及しているが、せん定作業等の省力、軽労化を図るため、より一層の低樹高化が望まれている。しかし、強い樹高短縮を行うと長さ1m以上の徒長枝が発生することが多い。そのため徒長枝のその結果母枝としての適応性を検討した。

その結果、「筑波」の超低樹高整枝樹の徒長枝は着花や結実が良く、結果母枝として利用すると低樹高整枝法とほぼ同等の収量や品質が得られた。また、せん定部位（結果母枝の基部）の高さが2m以下になり、低樹高整枝法と比べせん定作業が省力化された。

内容

三田市現地ほ場の13年生「筑波」を用い、超低樹高整枝区（せん定位置2m以下）と対照区（低樹高整枝）を設けた。超低樹高整枝樹のせん定は、①樹高制限（樹冠上部の側枝を2m以下で切り返し）、②側枝の間引き、③結果母枝の間引きの手順で行った。

超低樹高整枝樹では、結果母枝の基部径が太いほど、長さが長いほど、母枝当たりの雌花数が多く、生理落果後の着きゅう数も多い傾向が認められた（表）。これらの枝では母枝当たりの収量も多かったが、果実重に差はみられなかった。

徒長枝を利用した超低樹高整枝樹の13～15年生時の樹冠占有面積は、低樹高整枝樹の約90%で、生育期の樹高は0.4m低い3.6m程度であった。また、超低樹高整枝樹の3か年の平均収量（10a当たり）及び2L以上の果実割合は、対照の520kg、91%に対して、510kg、89%とほぼ同等となった（図1）。15年生時の間伐に伴って両整枝区ともせん定作業時間は

大きく減少し、また超低樹高整枝樹は対照樹と比べて平均でさらに10%少なかった（図2）。

以上のように、「筑波」の超低樹高整枝法では、徒長的な枝も結果母枝として利用することで低樹高整枝法とほぼ同等の収量や品質が得られ、せん定作業の平易、省力化にも効果が高いと考えられた。

今後の方針

「銀寄」など他の品種での適応性を検討する。

水田 泰徳（農業技セ・園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2424）

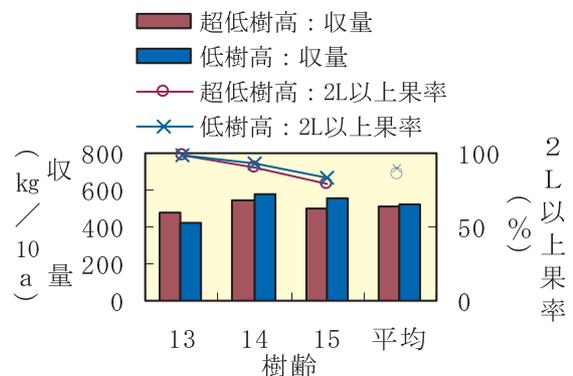


図1 整枝法と収量、2L以上果率

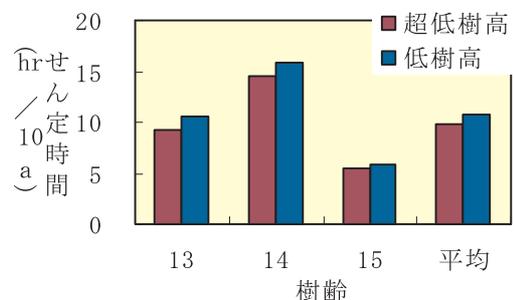


図2 整枝法とせん定作業時間

表 「筑波」の超低樹高整枝樹における結果母枝の形質と着花、着きゅう及び収量

	結果母枝の形質	雌花数	着きゅう数	着きゅう率 (%)	収量 (g)	果実重 (g)
基部径 (mm)	6.0～ 7.9	5.0	3.0	64.0	250	24.3
	8.0～ 9.9	6.5	5.6	87.0	276	23.7
	10.0～11.9	11.9	8.3	71.3	315	27.8
	12.0～13.9	17.5	12.3	70.1	506	23.4
	単相関係数	0.748***	0.696***	-0.151	0.392*	0.182
長さ (cm)	30～ 49	5.3	4.6	87.9	261	22.8
	50～ 69	8.7	6.8	78.7	398	26.3
	70～ 89	10.5	7.3	65.2	320	24.9
	90～109	13.0	8.0	62.0	150	25.8
	110～	22.0	15.0	68.2	595	23.8
単相関係数	0.626***	0.503**	-0.306	0.202	0.170	

注) 14年生、単相関係数の***は0.1%、**は1%、*は5%水準で有意なことを示す、n=30